

はじめまして。イラストレーター&切り絵作家のたけうちひろです。

2015年&2016年と2度訪れたイタリア・ボローニャブックフェアの様子をレポートしたいと思います。

2015年1月下旬、ボローニャブックフェアのサイトで入選者の名前が発表され、その中に「CHIIHIRO TAKEUCHI JAPAN」と自分名前を見つけました。サイトを見ていた携帯電話を放り投げるほど大パニックになった日から数ヶ月。英語も単語の羅列のみという私がひとりでイタリア・ボローニャへ。そして2度目の入選でまたまた興奮してあーあーとなった2016年。まずはそんな不安いっぱいで始まった私の「準備編」です。これからボローニャへ行かれる方の参考にしていただければと思います。

2015年初めての入選。2月初旬に板橋区立美術館の松岡さんから入

選の電話連絡を頂きました。イタリアへのフェアに参加する旨をお伝えすると、現地で出版社の人に见せるために必要なポートフォリオ、最低11見開きのダミー絵本かストーリーボードを用意した方が良くとアドバイスを頂きました。入選の実感があいてきたのと同時にやるべきことがたくさんあるとの焦りも。

フェア迄は2か月余り。イラストは入選作の5枚しか作っていませんでしたので残りの話を考えて作画しなければなりません。残りのページを普段の5倍ほどのスピードで製作し、製本するために業者に依頼しました(ダミー本は1冊あれば大丈夫なので手製でも良いと思います)。

そのほか英語の名刺やポスター(会場内のイラストレーターたちに用意された壁に貼る用)、名刺を入れる箱を用意しました(実際現地へ行くと出版関係者へPRできるというよりも同業者が好きなイ



↑小さいノートに英文やバスの路線地図、会場の見取り図を貼付けてガイドブックを作りました。

ラストレーターの名刺を集めたりしている方が多かったように思いました)。

また、同時にブックフェアに参加する出版社へアポイントを取るためにメールを200通ほど出しました。早めにメールを送ったので約30社の編集者とアポを取る事ができました。

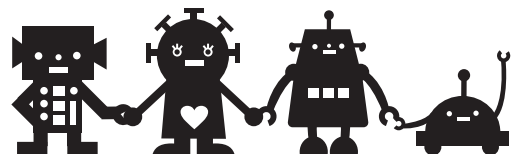
ミーティングの準備として、週に数時間英会話を習い始め(遅すぎますが)、英語が全く話せないで聞かれるかもしれない質問やイラストの制作方法、絵本の内容などを「指差し用」に英文にしてカンニングノートも作りました。世界各国から集まるフェアなので編集者さんたちも母国語が英語ではない人も多く、文章にしておくとかかりやすかったようで、困った時に指さしていると「パーフェクト!」と笑ってくれました。

英語はできるに越した事はないのですが、出来ないことは仕方がないと聞き直してポートフォリオやオリジナルのものもすべて英語をつけて、見てもらいやすく作りました(はじめての時は日本語版と両方用意しましたが英語のみでよかったです)。

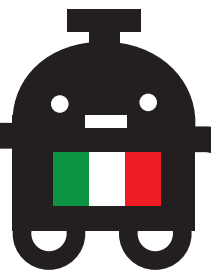
また携帯のアプリの翻訳機もインストール。今は音声で自動変換してくれるアプリもあるので、いよいよ困ったときは使えると思います(会場内はWifiもつながりましたし、入力までしてくれる優しい編集者さんも)。

調べるだけ調べ、やることはやったと準備は万端!(多分…)。

いよいよ次はブックフェア編です!







「ボローニャ国際児童図書見本市 (Bologna Children's Book Fair、ボローニャブックフェア)」は毎年4月初旬にイタリア・ボローニャで開催され、2016年は4月4日から7日まで計4万人近くの人々が来場。世界各国からの出版関係の出展社数は74か国で約1,300社にも及ぶようです。

活気溢れた会場に足を踏み入ると世界中から集まったイラストレーターたちが次々にポスターやフライヤーで壁を埋め尽くして行きます。早めに場所をみつけて貼っていても上からどんどん張り付けられていくので、会期中は何度も貼り直しも。

会場の広さは予想を遥かに超えています。入口でもらったMAPにマークをつけ、アポイントを取った会社への道順をチェックしながら、ひとまずJBBYの窓口へ。イタリア語や英語に囲まれて不安だった気持ちが一気に落ち着きます。ボローニャレポートなどでおなじみのYocciさんもここで歓迎してくれます。フェアの数日間は港へ帰る船のように何度も戻ってきては癒されていました。

そして入選作品の展示会場へ。世界中から選ばれたイラストレーター作品が一堂に展示されています。国によってカラーや技法が違っていたり、またまた自分の作品を見てくれている海外の人たちを見ると感動もひとしお。声をかけて名刺を渡してお友達になったりしました。



↑ぎっしりとポスターなどが貼られた壁が会場のメインスペースをぐるりと囲んでいて圧巻。空きスペースをみつけるのも一苦労。

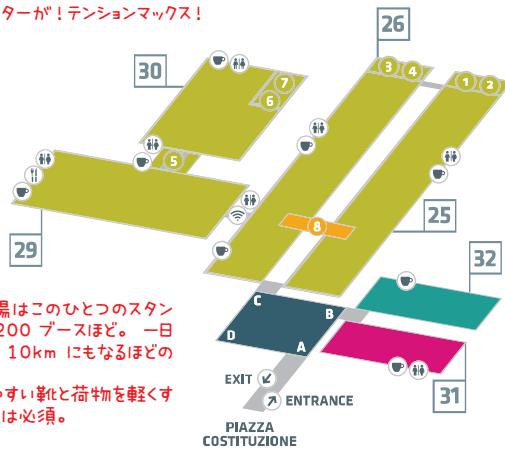


↑会場にはいろんなキャラクターが！テンションマックス！

↑2日目くらいには名刺入れにと作った箱も他の人のものかごんごん入れられていました。ポスターも数日で見えなくなるくらい重ね貼り。



↑ジャゼラートやピザなどのお店も多数。日替わりでいるんなお店を回るのも楽しい。



↑会場はこのひとつのスタンドに200ブースほど。一日赤くと10kmにもなるほどの広さ。歩きやすい靴と荷物を持てる工夫は必須。



↑同じ入選者と名刺交換したり、言葉はあからなくてもイラストレーターや出版社の人との交流ができるのも楽しいです。



↑授賞式は3日目に行なわれますがその後、通り過ぎがりの人たちに「Congratulation!!」と声をかけてもらえたのも嬉しかったです。

各国のメディアもたくさん来場しているのであちこちにカメラマンの姿も↓

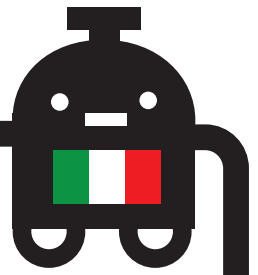


↑JBBYの窓口にはイタリア在住のイラストレーター Yocci さんも。一日中歩いて疲れたときは、顔をみただけで癒されます。

Yocci さんが出会った人コレクション。JBBY 窓口へ行くときインタビューされます↓







↑2015 年に出会った編集者の Alexandra。本のインタビューを。すぐれた出版社に与えられる BOP 賞にもノミネートされました。

ボローニャブックフェアへは授賞式だけではなくありません。イラストレーターにとっては入選した作品を出版社へ売り込むことが最大のチャンス。幸い私は事前にアポをとっていたので、編集者の人とのミーティングは比較的スムーズにいきました。ポートフォリオや絵本のダミー、原画をみせて興味のある出版社は具体的な契約の話や本の形式、内容の変更なども提示してくれます。2015 年はオーストラリアの BERBAY BOOKS の Alexandra と出会い、その後出版まで進める事ができました。そして一緒にスペイン等の出版社へ打ち合わせへいったり。他にもフランスやイタリアの編集者に会い、それぞれの国のカラーに合わせた編集を提案されました。

ブースではアポを取っていない人にもイラストレーターのために時間を空けてくれる出版社があるので長い行列もあちこちで出ていました。大きなファイルをもって行き交うイラストレーターや美術学校の学生さんたちで会場は賑わい、単独で乗り込んだという日本人の方にも数人出会いました。日本語が聞こえてくるといついつい近寄っていきたくなくなります。

日本の出版社のブースには 2016 年の審査員をつとめたみうらたろうさんの新作絵本がたくさん並んでいたり、見慣れた絵本の翻訳版が並んでいたり。また、今年の「ボローニャガッツィ賞」の特別賞を受賞したワンストロークの駒形克己さんの前には大勢の順番待ちの人が。話を聞いて頂くとなるほど！とひとつひとつの言葉にあたたかさを感じ、迷える人の相談所になるのも納得。

2015 年、2016 年ともに各 30 社近くの出版社とミーティングし英語圏とイタリア、フランスでの出版契約を結ぶことが出来ました。単独での渡伊、しかも英語も話せないし、出版社をどう選んでよいかもあからなかったのですが、ブックフェアを通じて出会った人に相談したり、何より言葉の壁を超えてでも本を出版しようとしてくれる良い編集者さんたちとの出会いがありました。これから応募しようとしている人、行くのはちょっと...と思っている人、迷ってるならまず「行ってみるごと」だと思います。すぐには出版に至らなかったとしても、たくさんの人と出会ったり、さまざまなイラストや絵本から刺激を受け、そこから学んだり、考えたりすることはこれからの作家活動にかけがえのない糧となると思います。はじめてだらけで不安もいっぱいだった私ですが、調べ尽くして挑戦できたことで達成感もいっぱいの日々でした。

ぜひぜひボローニャへ行って空気感を味わってみてください！



↑昨年入選者、ポーランドのマウゴジヤ・グロフスカさんとばったり。その他、会場でもちらほらと昨年度の顔見知りとの出会い、言葉を掛け合ったり。



↑みうらさんの新作がずらりと並んだブース。海外の人にも大人気でした。



↑昨年の審査員 MOMA (ニューヨーク近代美術館) KIM・Charles 氏や Benjamin Chaud 氏にも遭遇。おぼえてくれていて、「今年もようこそ!!」と声をかけてくれました。



↑最終日近くなると出口に「SEE YOU NEXT YEAR! SAVE THE DATE: 3-6 APRIL 2017」の文字が。

出会ったすべての人に感謝!  
Thank you Bologna!!  
See you Bologna!!



↑左から今年の審査員もつとめられたみうらたろうさん、板橋区立美術館の松岡さん、駒形克己さん。駒形さんのブース ONE STROKE は迷える人の指南場所。手相をみてもうかのような盛況ぶり。